

心理コンサルテーションの実践研究②
児童養護施設におけるコンサルテーション
—評価の枠組みと方法—

鹿児島純心女子大学大学院
鹿児島純心女子大学大学院

福 永 真理奈
若 本 純 子

和文要旨

本稿では、児童養護施設におけるコンサルテーションをより有効にするために重要な、コンサルテーションに対する評価について論じた。まず、先行研究を基に理論的考察を行い、評価がコンサルティの視点から行われる必要性および、児童養護施設におけるコンサルテーションではプロセス評価が有効であることが示唆された。続いて、それらの指摘に込めうる評価方法として、半構造化面接と質問紙による3時点（毎回のコンサルテーション後、半期終了後、全コンサルテーション終了後）、9種の評価項目を提示した。

キーワード：児童養護施設 心理コンサルテーション コンサルティによるコンサルテーションの評価 プロセス評価

はじめに

近年の児童虐待の増加に伴い、児童福祉施設はその対応に追われている。2012年には、児童相談所での児童虐待相談対応件数は過去最高となり（厚生労働省、2012）、児童福祉施設の一つである児童養護施設も、被虐待児の入所数が増加の一途を辿っている傾向にある（厚生労働省、2009）。さらに、児童養護施設に入所した被虐待児の被虐待体験が、子どもの行動や情緒問題に大きな影響を及ぼしていることが認められており（石、2006；中山、2011；下笠、2004；坪井、2005、2007）、施設内での心理的な支援の必要性が高まっている。そのような経緯から、1999年度に厚生労働省は、被虐待児への心理療法による治療や、職員への専門的助言等を期待して、児童養護施設に心理担当職員を導入するに至った。

著者らは、若本・福永（2013）で、児童養護施設における心理担当職員の取り組みには未だ課題が多く、心理担当職員の専門性の更なる向上を

目指すことや、心理担当職員の働く環境を整備し、その専門性を十分に発揮できる場を作っていくことが求められていることを指摘した。そして、そのような現状に対する有用な支援形態が心理コンサルテーションであることを示唆した。

本稿では、これらの考察を踏まえ、児童養護施設において、より有用な心理コンサルテーションを実現するために最も重要になる「評価」に関して検討を行い、具体的な方法を提示することを目的とする。

I. 心理コンサルテーションの評価に関する理論的考察

児童養護施設における心理コンサルテーションを有効化するための評価方法を提示するに先立ち、まずは先行研究を基に、コンサルテーションという支援方法の特徴を述べて児童養護施設の現状を踏まえながら、心理コンサルテーションの評価のあり方について検討していく。

1. 心理コンサルテーションの特徴

コンサルテーションとは、コンサルタント (consultant) とコンサルティ (consultee) によって構成される異なる領域の専門家間の支援形態を指す。コンサルテーションでは、コンサルティが直近で抱えている問題の解決に向けた取り組みのみならず、コンサルティが自らの専門性を最大限に生かしながら問題に対処する力をつけ、その結果がコミュニティ全体の対処能力の向上と問題発生予防につながることを最終的な目標としている (箕口・上手, 2007)。

コンサルテーションの中でも、心理コンサルテーションと言及する際には、「心理的課題を抱えたクライアントを支援する責任のあるコンサルティが、クライアントへのよりよい支援を提供するために、心理学の専門家であるコンサルタントに自発的・主体的に相談するプロセスであり、コンサルティがコンサルタントの持つ専門的知識と技法を共有しながら、問題解決の方法を探っていく相互作用の過程 (加藤, 2006, p.71)」と、コンサルタント側の専門性が明示される。しかし、当然のことながらコンサルテーションの基本的な考え方に則り、コンサルティのニーズが重視され、コンサルタントはそのニーズに応えるようコンサルテーションを構築する。したがって、坪井・李 (2007) が指摘するように、コンサルテーションを行う場合には、対象とする場や集団、クライアントの特性、風土に即したコンサルテーションの方法とモデルを検討する必要がある。換言すれば、実施されているコンサルテーションがコンサルティの所属するコミュニティに即したものになっているか、またコンサルティの特性に応じたものになっているかという視点がコンサルテーションを有効なものとするためには重要になると考えられる。

コンサルテーションにおいてコンサルティを重視する視座は、コンサルテーションが数多く行われている欧米の研究ではより明確である。たとえば、比較的妥当性が高い Brown, Pryzwansky, & Schulte (2001) のコンサルテーションプロセスに関する8段階のモデルでは、終結の直前にあ

る第7段階に「評価」を位置づけている。ここから、欧米ではコンサルテーションを実施する上で、コンサルティによる評価を行うことが前提条件となっていることが窺える。加えて Brown et al. (2001) は、コンサルテーション活動が成立するための基本的前提として、コンサルタントがどのような支援を行うのか、そしてコンサルテーションがどのような支援であるのかについてコンサルティが理解していることが必要だとする。この理解があつて初めて、コンサルティは自身のニーズを臆することなく、的確に提示することができ、それがコンサルテーションを有効に進めることに寄与するからである。コンサルテーション発祥の地である欧米では、コンサルテーションの成否はコンサルティのニーズに応え得たか否かであることから、コンサルティによる評価が欠かせないということが共有されていると言ってよい。

2. 日本の児童養護施設における心理コンサルテーションの評価研究とその課題

それでは、わが国における心理コンサルテーションに対する評価はどのような状況にあるのだろうか。

加藤 (2006) は、これまでの心理コンサルテーションに関する研究は、学校領域での事例研究に限定され、他領域の、そして実証的アプローチの研究に乏しいと述べている。さらに、効果や実践上の工夫については論じられているが、機能や目的、方法やプロセスについての議論は十分ではないことも指摘されている。この指摘を踏まえると、児童養護施設における心理コンサルテーションの評価研究は極めて稀少であろうと推測される。実際、著者らが文献を検索したところ、該当する研究は唯一、心理コンサルテーションを実施している1児童養護施設において質問紙調査を行った箕口 (1987) の研究のみであった。だが、そこでの評価は、助言の仕方や内容についてのわかりやすさや、相談ケースへの理解の深まり、コンサルタントのイメージを問うこと等に限られており、ある問題に対してどのような助言が役に立ったの

かなど、コンサルテーションプロセスに対する具体的かつ実証的な検討は全く行われていない。加えて、この研究は今から20年以上前に行われた研究である。1999年には児童養護施設に心理担当職員が導入され始め、児童養護施設における心理担当職員や児童が示す心理的問題に対する認識は、当時とは大きく異なることが推測されることから、箕口（1987）の知見と現状との間にはズレが生じてしまっていると考えられる。

その後、コンサルティによる評価を検討する研究が皆無である現状、そして現在の児童養護施設の状況を鑑みると、新たな視点も加え、心理コンサルテーションに対する評価研究を行っていく必要がある。さらに、その評価は、コンサルテーション終了後の全般的な評価のみならず、介入プロセスにおいて、どの助言や提案がコンサルティにとってどのように有効であったのか等をコンサルティが直接的に評価し、実証的かつ具体的に明らかにしていくものでなければならないだろう。それらはコンサルテーションを、よりコンサルティのニーズにあったものに改善し、有効化することに繋がると考えられるためである。

3. 心理コンサルテーションの評価の枠組みの構築に向けて—プログラム評価理論からの示唆

コンサルティからの評価が、コンサルテーションを有効化するために重要であるとのこれまでの議論を踏まえ、ここでは、コンサルテーションに対する評価の在り方についてさらに考察していくこととする。以下では、笹尾（2007）を基に論を進めていく。

プログラム評価とは、「ある特定の目的をもった介入プログラムに関しての実施状況や結果情報を系統立てて収集し、より効果的なプログラムに向けてそれらの情報を活用すること（p.378）」と定義されるものである。プログラム評価は、そのプログラムが効果的であったか否かという実証的エビデンスを示すことのみならず、より効果的なプログラムの開発の際に必要な情報の提供のためにも重要となってくる。加えて、プログ

ラムの実施後の効果を測定する最終的な評価だけでなく、実施プロセスを査定することでプログラムの改善にも役立たせることができるという。

上記のように、プログラム評価には、いくつかの目的や実施時期があり、それらに応じて通常3つに分類することができる。

一つ目は、プロセス評価（process evaluation）である。これは、プログラムの実施前、実施の際に関連する事柄（人的・金銭的資源、介入プログラムの内容策定、プログラム提供のセッティング、プログラムスタッフと組織のインフラ等）に関しての評価であると言える。具体的には、プログラムが実際にどのように行われたかということを、任意の時点で尋ねていく評価のことである。

二つ目は、アウトカム評価（outcome evaluation）である。これは、プログラム実施直後の効果を検証するものであり、後述の「インパクト評価」と異なり、プログラムが終了後短期間の効果を測定するものだという。すなわち、そのプログラムの終了直後の効果は何かということを同定するものと言える。

三つ目は、インパクト評価（impact evaluation）だが、これは、プログラムの最終的な効果、あるいは長期的な効果を測定するものである。言い換えると、プログラムの最終的な効果は何かということであり、それぞれのプログラムのインパクトは、プログラムの背景である理論やモデルから導かれるものだと言える。

以上のように、プログラム評価には3種の方法があるが、日本の児童養護施設における心理コンサルテーションには確立された特定のプログラムは無く、プログラムに基づいて組織的に心理コンサルテーションが実施されているとは言えない状況にある。そこから、プログラム終了後に効果を測定するアウトカム評価、インパクト評価よりも、コンサルテーションにおいて、どのようなプロセスが有効であったかを評価するプロセス評価の方が、コンサルテーションをいかに有効化していくかに関する、より豊富な資料を提供してくれると考えられる。しかし、そうであるからといって、

アウトカム評価、インパクト評価が不要な訳ではない。実施した心理コンサルテーション自体が有効であったかどうかを測定するためにはアウトカム評価、インパクト評価の実施も重要となってくる。

まとめ 以上の先行研究と、その考察より、心理コンサルテーションにおける評価に関して以下にまとめた。

まず、コンサルテーションの成否はコンサルティのニーズに答え得たか否かで決定すると考えられ、より有効なコンサルテーションを実施するためには、コンサルティによる評価が欠かせないと言える。加えて、わが国では、箕口（1987）以降、心理コンサルテーションにおけるコンサルティからの評価を検討する研究が皆無であるため、児童養護施設の置かれている現状に即した心理コンサルテーションに対する評価研究を新たに行う必要がある。

また、その評価としては、以下の3つを組み合わせる必要があると考えられる。まずは、従来の児童養護施設における心理コンサルテーションにおいても実施が見られた、実施した心理コンサルテーションが有効であったかどうかを測定するためのアウトカム評価とインパクト評価である。これはコンサルテーションの成否を知るための指標としては欠かせない。一方、日本の児童養護施設における心理コンサルテーションに確立された特定のプログラムが無い状況にあることを踏まえると、どの助言や提案がコンサルティにとってどのように有効であったかをコンサルティが直接的に評価し、実証的かつ具体的に明らかにしていくことができるプロセス評価の方が重要になっていくであろう。このように、コンサルテーションに対する評価を行うことによって心理コンサルテーションを、よりコンサルティのニーズにあったものとし、心理コンサルテーションの有効化に繋がることが期待される。

Ⅱ. 本研究における心理コンサルテーションの評価の測定法

前項では、児童養護施設における心理コンサルテーションの評価について、先行研究を基に考察した。その結果から、心理コンサルテーションの評価を体系化すること及びその枠組みを定めること、そして評価のための具体的な項目を考案し、評価のツールを作成する必要があることが考えられた。以下では、児童養護施設への心理コンサルテーションの評価をより有用なものとするための、本研究で行おうとする評価の方法について述べていきたい。

第一に、本研究では、コンサルティによる心理コンサルテーションの評価の重要性を鑑み、コンサルティにより心理コンサルテーションに対する評価を行ってもらう。第二に、評価の際には、プロセス評価を重視した上で、アウトカム評価、インパクト評価と組み合わせて評価を行う。この際、アウトカム評価およびインパクト評価の2つに関しては、既に確立されたプログラムに関して評価を行うわけではなく、心理コンサルテーションの成否を知ることによって焦点を当てているため、双方の区別を行う必要はないと考えられる。故に、本研究ではこの2つを合わせて効果の評価を行う。また、評価の時期（タイミング）としては、1. 毎回の評価、2. 中間（半期終了後）の評価、3. 最終（全コンサルテーション終了後）の評価という3つの時期で評価を行っていくこととする。それぞれの評価の項目の概要を表1に示す。

1. コンサルテーション毎の評価

毎回のコンサルテーションに対して、コンサルタントと異なる研究者により半構造化面接を実施する。内容としては、その日のコンサルテーションで特に印象に残っていることや、今後の要望等について尋ねる。

コンサルテーションの実施直後にその日の内容を振り返ることで、コンサルティにとって有用であったコンサルタントの提案や助言について、具体的な内容を尋ねることができ、コンサルティがコンサルテーションの場で感じた思いに関しても、まだその記憶が新しく、色褪せていない内に聞くことができると考えられる。

表1 評価の時期・タイミングにおける調査の種類ごとの評価内容の分類

	毎回の評価	中間評価	最終評価
時期・タイミング 調査の種類	毎回	半期終了後	全コンサルテーション終了後
半構造化面接	○プロセス ・その回のコンサルテーションを受けて印象に残ったこと、感じたこと。	○プロセス ・コンサルテーション実施直後と比べて、コンサルテーションが役に立ってきているか。 ・半期のコンサルテーションの中で、コンサルティに影響を及ぼしたコンサルタントの具体的な助言や提案について。	○プロセス ・後期のコンサルテーションが役立つものだったか。 ・コンサルテーション全体の中で、コンサルティに影響を及ぼしたコンサルタントの具体的な助言や提案について。
	なし	□アウトカム/インパクト ・コンサルタントの助言や提案が、コンサルティの意見や行動にどう影響したか。	□アウトカム/インパクト ・コンサルテーションを実施する前と比べての変化について。 ・コンサルタントの助言や提案が、コンサルティの意見や行動にどう影響したか。
		◇その他 ・今後の要望	◇その他 ・コンサルテーションでもっと取り扱いたかったことについて。 ・コンサルティによるコンサルテーションの定義
質問紙	なし	<p>○プロセス ・コンサルタントの態度について（よい聞き手であったか、熱心に応じていたか等） ・コンサルタントの考えや助言等がコンサルティや現場の環境に合っていたか。 ・コンサルタントのかかわりが問題の特定、理解、解決に役立ったか（具体的な方法まで）。 ・コンサルテーションに満足しているか、役立つものだと思うか。</p> <p>□アウトカム/インパクト ・対象児や問題についての専門的な理解が促進され、専門的なかかわりができるようになっているか。 ・専門的な知識、技術をより多く獲得し、用いることができるようになっているか。 ・コンサルテーション実施前と比べ、職員としての能力に自信が持てるようになったか、周囲から期待されるようになっていると思うか。 ・コンサルタントから独立して、問題に対処できるようになったと思うか。 ・今後、自ら、新たな介入やアプローチを開発できると思うか。</p>	

また、毎回の評価を蓄積し、後日実施されたコンサルテーションや評価と合わせて検証することで、その回でコンサルティが有用だと感じた助言や提案、および、コンサルティの想いが、後のコ

ンサルテーションにおけるコンサルティの発言の内容や、情報の提示の仕方、さらには、コンサルタントの働きかけに対する応じ方等にどのように影響していくかを考えるのに役立つことが期待さ

れる。

2. 中間評価

コンサルテーションを実施して半期が経過した時点で、コンサルティに対し、これまでのコンサルテーションについて尋ねる半構造化面接及び質問紙調査を実施する。半構造化面接の項目を表2に、質問紙調査の内容を表3、表4に示す。これらの項目は、Brown, Prywansky, & Schulte (2010)を著者らが和訳し、わが国の児童養護施設の状況を勘案して作成したものである。

半構造化面接 半構造化面接では、プロセス評価の項目として、コンサルティにとってのコンサルタントおよびコンサルテーションの有用性や、コンサルティに影響を及ぼしたコンサルタントの具体的な介入に関して尋ねる。また、アウトカム/インパクト評価に関する質問項目としては、コンサルタントがコンサルティに与えた影響の中身について、コンサルティの意見や考え方、行動にどのように影響し、変化を促したのかを問うものである。例えば、コンサルタントの考えがコンサルティそれと異なっており、それ故にコンサルティに新しい気づきがもたらされ、その気づきに基づいた支援を行うようになったり、コンサルティが現場で行っている支援に対して、コンサルタントがコンサルティを労い、その頑張りを認めることで、コンサルティが日々の活動に自信を持って取り組めるようになること等がそれに当たると考えられる。

加えて、今後のコンサルテーションではどのような内容を取り扱っていききたいかという今後の要望についても尋ねる。

質問紙調査 質問紙調査では、中間と全コンサルテーション終了後で同じものを使用する。同じ内容の問いに答えてもらうことにより、コンサルティの変化を明確に捉えることができるからである。質問紙の中身としては、コンサルタントおよびコンサルテーションに関して尋ねる、プロセス評価の質問項目が中心の評価（表3）とコンサルティ自身の変化について尋ねるアウトカム/インパクト評価に関する質問項目が中心の評価（表4）

表2 中間評価で用いるコンサルテーション評価面接項目

1. この半年間のコンサルテーションでは、どのようなことを変えていきたいか。
2. この半年間のコンサルテーションで、やり始めと今とを比べるとコンサルタントが役立つものになってきているか。
3. 今までのコンサルテーションの中で、特にコンサルタントのどんなコメントや提案が心に残っているか。
4. コンサルタントの言ったことや行ったことは、あなたの意見や行動に何か影響を与えたか。
→追加質問（『影響を与えた』との回答が得られた場合）

a. コンサルタントは何を言ったり行ったりしたか。
b. コンサルタントが言ったり行ったりしたことについてどう感じたか。
5. 今までのコンサルテーションの結果を通して、次回からのコンサルテーションで話し合いたいことは何かあるか。

注) Brown et al. (2010) の、APPENDIX B (p.246), APPENDIX C (p.247) を参考に作成した。

の2つの内容で構成されている。前者は5段階評定（かなりそう思う・ややそう思う・どちらともいえない・あまりそう思わない・全くそう思わない）、後者は3段階評定（はい・いいえ・わからない）で回答を求める尺度である。

コンサルタントおよびコンサルテーションに関して尋ねる問い（プロセス評価に関する質問項目）では、よい聞き手であったか、熱心に応じていたか等のコンサルタントの態度について、また現場の環境に応じた助言が提供できていたか、コンサルタントのどんな提案や助言が問題の特定、理解、解決に役立ったか、そしてコンサルテーションへの満足度等について質問した。一方で、コンサルティ自身の変化について尋ねる問い（アウトカム/インパクト評価に関する質問項目）では、コンサルティが現場での問題を専門的に理解できるようになっているか、および現場での問題に対するコンサルティによる支援が促進されているか、専門的な知識や技術は習得できているか、職員としての能力に自信が持てるようになったか、一人で問題に対処できるか、新たな介入ができるか等について尋ねている。

表3 中間評価、最終評価で用いるコンサルタントおよびコンサルテーションに関する質問紙調査項目（プロセス評価）

1. コンサルタントは全般的に役立った。
2. コンサルタントは役立つ情報を提供した。
3. 児童養護施設における心理士の仕事についてのコンサルタントの考えは、あなたが持っていた考えに似ていた。
4. コンサルタントは問題解決の代案を見つけることであなたを助けた。
(例：ある児童への関わり方について行き詰まっているときに、コンサルタントが『こういうやり方もある』と代案を出した等。)
5. コンサルタントはよい聞き手であった。
6. このコンサルタントは、何が役に立つものなのかを特定することに役立った。
7. コンサルタントは自分の児童養護施設の環境によく合った。
8. コンサルタントは多くの視点をもってあなたを励ました。
9. コンサルタントは自分を専門家というよりも一緒に働く協力者と考えていた。
10. コンサルタントは、お互いの話し合いの内容を、あなたが関わっている児童や施設にどうあてはめ、どう実際に支援していくか考えることを助けた。
11. コンサルタントは、その問題を全面的に請け負うことなく、あなたが関わるべき問題ということを尊重しながら援助を行っていた。
12. 他のコンサルタントにコンサルテーションを頼むことができて、今のコンサルタントに再度コンサルテーションを依頼するだろう。
13. コンサルタントは、どのようなことが問題となっているのかを特定する手助けをしてくれた。
14. コンサルタントは、その問題の中身をよりわかるよう手助けをしてくれた。
15. コンサルタントは、あなたが何か言ったとき、何を言いたいか理解してくれているように思えた。
16. コンサルタントは、あなたが感じていたことを、より自分でわかるよう手助けをしてくれた。
17. コンサルタントは、あなたがわかりやすい言葉で問題を言いかえた。
18. コンサルタントは話した問題について熱心に応じていたと思う。
19. あなたは、コンサルタントの関わり方が好きである。
20. この3か月のコンサルテーションの中で行ったことについて、とても満足している。
21. 今までのコンサルテーションの経験を基に考えて、コンサルテーションは、とても役に立つものだと思う。
22. もしコンサルタントが問題の理解を助けたときに、以下のどの方法でそれを行いましたか。(複数回答)

{	<ul style="list-style-type: none"> ・ コンサルタントが知っている同様の問題を例として示すことにより ・ 他の児童養護施設職員の抱えている問題についてあなたに伝えることにより ・ 児童の抱えてきた問題について話し合うことにより 	}
---	---	---
23. コンサルテーションの間、コンサルタントは、あなたがやりたいことをあなた自身に決めさせてくれましたか。

注) Brown et al. (2010) のAPPENDIX B (p.246) , APPENDIX D (p.248) を参考に作成した。

以上のように、中間の評価では、半構造化面接および質問紙調査の二つを組み合わせるプロセス評価およびアウトカム/インパクト評価の双方を実施することで、コンサルティにとって有用だったのは、コンサルタントのどのような介入だったのかを特定することができると思われる。さらには、その介入によって、コンサルティの意見や考え方、行動に対してどのような変容がもたらされ

たのかを明らかにすることで、コンサルティのその変容が、コンサルテーションに対するモチベーションや、そこで取り扱われる内容の変化にどのように作用していたのかを考えることにも役立つと考えられる。

質問紙調査では、半期終了後および全コンサルテーション終了後で全く同じ質問紙をコンサルティに答えてもらうことにより、調査時期の異なる質

問紙調査の結果を比較することができ、コンサルテーションの時期によるコンサルティの変化を、明らかに捉えることができるだろう。さらに、半構造化面接の内容と関連のある内容の項目を用いて、面接で得られた情報と質問紙で得られた情報とを組み合わせることで評価について検証していくことも可能だと考えられる。

一方で、半構造化面接の最後の質問である、今

後のコンサルテーションにおける要望に関しては、現在のコンサルティのニーズを把握し、有用なコンサルテーションを考えていくことに役立つのはもちろんのこと、コンサルティが半期のコンサルテーションを経て、どのようなステップアップを果たしたか判断する手がかりになることが示唆される。

表4 中間評価、最終評価で用いるコンサルティ自身に生じた変化に関する質問紙調査項目（アウトカム/インパクト評価）

1. 以前よりも児童の行動について理解できるようになっている。
2. 以前よりも多様な背景を持つ児童をより深く理解し、認めることができるようになっている。
3. 児童に接するにあたって、児童から集めた情報をより重要な判断材料として用い、かかわるようになっている。
4. 多数の問題のある児童を支援する際、以前よりも優先順位をつけることがうまくなっている。
5. 問題解決にあたって、より体系的なやり方を使うようになっている。
(例：今後の見通しを立てる、保育士・児童指導員と連携をとる、など)
6. 以前よりも、児童の問題に対する対処の仕方がうまくなっている。
7. よりよい職員になれるような技術や知識をより多く獲得した。
8. 職員としての役割の範囲内で、児童の問題を取り扱う能力について以前よりも自信がある。
9. 上司や同僚たちは、私が以前より仕事により多くの成果をもたらすことができている。
10. 人間行動の法則（人間がどう動くかの法則）について、これまでよりも大きな理解を得られている。
11. コンサルタントから独立しても、私とその専門性に応じて身につけてきたことを問題に対して適応できる自信がある。
12. 学習や発達を促進するような介入を計画できる。
13. 児童の全体的な発達を促進するような、子どもへの新たなアプローチを開発している。
14. 将来、その子どもたちのための介入を開発できる自信がある。

注) Brown et al. (2010) のAPPENDIX E (p.249) を参考に作成した。

3. 最終評価

コンサルテーションが終了した際に、コンサルティに対し、半構造化面接および質問紙調査を実施する。面接での質問項目として、プロセス評価に関しては、中間評価と同じく表2に示した通りとする。一方、アウトカム/インパクト評価の項目を表5に示す。なお、質問紙調査に関しては既に説明したため、ここでは繰り返さない。

半構造化面接 全コンサルテーション終了後の半構造化面接では、プロセス評価にかかわる質問項目として、中間の評価と同様に、後半のコンサルテーションが役立つものであったかや、コンサ

ルティに影響を及ぼしたコンサルタントの具体的な助言や提案について尋ねる。一方で、アウトカム/インパクト評価に関する質問項目としては、コンサルタントがコンサルティに与えた影響の中身に加え、コンサルテーションの実施以前と終了後を比べての変化についても尋ねることとする。さらに、コンサルテーションでもっと取り扱いたかったことについても質問を行うこととした。

最終評価では、中間評価と同じの内容に加えて、最終評価独自の内容を設定している。それによって見出されること、あるいは最終評価と他の評価を組み合わせることで考えた際に見出されるのを期待し

ていることについて以下に述べていく。

まず第一に、コンサルティに対し、コンサルテーションの定義を尋ねているのは、最終評価独自の項目である。コンサルティによる回答と、実際のコンサルテーションの定義との比較を行うことで、コンサルティにとってのコンサルテーションがどのようなものであったか見えてくるかもしれない。

第二に、コンサルティが自身で感じている変容について、自身、入所児、職員という3つの柱を立てて尋ねていることは、最終評価のみの独自性があるといえる。このことより、全コンサルテーションを通しての変容が、どのような面に重きをなしつつ生じるのかを明らかにすることができると考えている。

一方で、これら最終評価と他の評価を組み合わせ

せることで、コンサルティに生じた変容の過程についても知ることもできるように思われる。例えば、最終評価で自身の変容について語られたとして、それがどういったコンサルタントの介入によるものなのかを、毎回の評価で語られたことを基に特定していく。さらに、そのことについて、中間評価の時点でも言及されているのか否かを調べ、もしそこで話されているのであれば、最終評価で話されている内容と比較し、その変容をより詳細に捉えることができる。このように、評価を組み合わせ、変容のプロセスを明らかにすることで、コンサルタントのどのような介入がコンサルティにとって有効であったかを明らかにすることができることを期待している。

表5 最終評価で用いるコンサルテーション評価面接項目

1. この半年間のコンサルテーションで、何か変化したことはあるか。

⇒追加質問

- a.自分自身のことではどうか
- b.入所児童のことではどうか
- c.職員のことでどうか
- d.もし今のあなたがコンサルテーションを実施する前のあなたにアドバイスできるとしたら、
どんなことを言うか。

2. この後期のコンサルテーションは役立つものだったか。

3. 今までやってきた中で、特にコンサルタントのどんなコメントや提案が心に残っているか。

4. コンサルタントの言ったことや行ったことは、あなたの意見や行動に何か影響を与えたか。

⇒追加質問（『影響を与えた』との回答が得られた場合のみ）

- a.コンサルタントは何を言ったり行ったりしたか。
- b.あなたは、コンサルタントが言ったり行ったりしたことにどう応じたか。

5. この半年間のコンサルテーションでもっとやってみたかったことはあるか。

6. この半年間のコンサルテーションを踏まえて、「コンサルテーション」とはどのようなことをする場だと思うか。

注) Brown et al. (2010) のAPPENDIX B (p.246) , APPENDIX C (p.247) を参考に作成した。

終わりに

本稿では、児童養護施設への心理コンサルテーションを有用なものにするための重要な要素と考えられる評価の枠組みを定め、具体的な評価項目を考案した。著者らは既に2012年11月より、こ

れらの方法を用いてコンサルテーションの評価を行い、児童養護施設におけるコンサルテーションの検討に着手している。今後はその成果について順次報告していく予定である。最後に、お忙しい中、研究に協力してくださっている職員の方々に心からの感謝を申し上げ、本稿の結びとする。

文献

- Brown, D., Prywansky, W. B., & Schulte, A. C. (2001): *Psychological consultation and collaboration: Introduction to theory and practice (5th ed.)*. Boston: Allyn & Bacon.
- Brown, D., Prywansky, W. B., & Schulte, A. C. (2010): *Psychological consultation and collaboration: Introduction to theory and practice (7th ed.)*. thBoston: Allyn & Bacon.
- 加藤尚子(2006): 心理コンサルテーションに関する基礎的研究- 虐待を受けた子どもの援助者への適用を目的として- 子どもの虐待とネグレクト, 8(3), 376-387.
- 加藤尚子(2006): 虐待を受けた子どもの援助職への心理コンサルテーション適用に関する文献的考察- 児童養護施設における共同的心理支援モデルの構築に向けて- コミュニティ心理学, 10(1), 69-85.
- 厚生労働省(2009): 児童養護施設入所児等調査結果の概要 平成20年2月 (<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jidouyugo/19/dl/01.pdf>)
- 厚生労働省(2012): 平成23年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数 平成24年7月, 子ども虐待による死亡事例等の検証結果(第8次報告の概要)および児童虐待相談対応件数等 (<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002fxos-att/2r9852000002fy23.pdf>)
- 中山万里子(2011): 児童養護施設における子ども暴力 白鷗大学教育学部論集, 5(1), 155-181.
- 笹尾敏明(2007): プログラム評価の計画と方法 日本コミュニティ心理学会(編) コミュニティ心理学ハンドブック 東京大学出版会 pp.377-399.
- 下笠幸信(2004): 被虐待児のプレイセラピーにおける攻撃と依存- 児童養護施設Cでの事例を通して- 臨床教育心理学研究, 30(1), 71-80.
- 石曉玲(2006): 児童養護施設における子どもの情緒的・行動的問題アセスメント- 被虐待児を中心とした治療的対応を巡って- 臨床心理学研究, 32(1), 1-8.
- 坪井裕子(2005): Child Behavior Checklist/4-18(CBCL)による被虐待児の行動と情緒の特徴- 児童養護施設における調査の検討- 教育心理学研究, 53, 110-121.
- 坪井裕子(2008): 児童養護施設における臨床心理士の役割と課題 人間環境大学『こころとことば』, 7, 47-59.
- 箕口雅博(1987): 養護施設における臨床・サイコロジストの役割- 精神衛生コンサルタントの立場から- 心と社会 50, 13-21.
- 箕口雅博・上手幸治(2007): コンサルテーション 日本コミュニティ心理学会(編) コミュニティ心理学ハンドブック 東京大学出版会 pp.150-172.
- 箕口雅博・上手幸治(2007): 介入戦略と方法 日本コミュニティ心理学会 コミュニティ心理学ハンドブック, 東京大学出版会, pp.147-256.
- 若本純子・福永真理奈(2013): 心理コンサルテーションの実践研究① 児童養護施設における心理コンサルテーション- 研究の背景と理論的枠組み- 鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要, 8, 11-18.

Psychological consultation in Children's home: Framework and method of the evaluation to psychological consultation.

FUKUNAGA Marina, WAKAMOTO Junko

This article discussed about the evaluation to psychological consultation in children's home. At first, we reviewed previous studies of consultation, and found that necessity of consultee's evaluations and effectiveness of process evaluations. Next, we suggested that an evaluation method, including 9 items by interviews and questionnaires, which was conducted after each consultation, half term, and whole term.

KeyWords : children's home, psychological consultation, evaluation to consultation by consultee, process evaluation